

学 位 論 文 要 旨

氏 名 永井 明子

題 目 児童期における関係性攻撃が健康・適応と仲間関係に及ぼす影響  
—関係性攻撃への教育的介入の可能性を考慮して—

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

攻撃性をフラストレーション等でもたらされる怒り感情を伴う反応的攻撃と目的を達成するための道具として攻撃行動を使う道具的攻撃とに大別するという考え方（Crick & Dodge, 1996; Dodge & Coie, 1987）に従い、さらに反応的攻撃を反応的表出性攻撃と反応的不表出性攻撃に細分化し、道具的攻撃を道具的關係性攻撃で代表させるという分類方法（坂井・山崎, 2004a ; 山崎, 2002a）に従い、児童の攻撃性の特徴、中でも道具的關係性攻撃の特徴を明らかにすることを目的とした。

研究1（坂井・山崎, 2004a）では、上記の分類方法に従い、反応的攻撃（反応的表出性攻撃および反応的不表出性攻撃）と道具的關係性攻撃を測定することができる、十分な信頼性と妥当性を兼ね備えた質問紙、児童用道具的攻撃性質問紙（PRAQ-C）を完成させた。この質問紙を使用し、研究2（坂井・山崎, 2003a）では児童の攻撃性の基礎的データを集めた。得点の分布、分類基準、学年差と性差、および各攻撃性間の相関状況について、詳しい資料が提供され、ある児童の得点が全体のどのあたりに位置するのかを大まかに示す基準として利用可能となった。

研究3（坂井・山崎, 2003b）および研究4（永井・山崎, 2017）では、児童の適応・健康状態を検討した。児童の適応問題は外在化問題と内在化問題に分類されるが、研究3では内在化問題に焦点をあて、抑うつ傾向および学校適応（学校生活享受感情）と攻撃性の関係を明らかにした。女児の場合は道具的關係性攻撃の高さが抑うつ傾向を低め、男児の場合は道具的關係性攻撃の高さが学校生活享受感情を低めるという、男女で異なる結果が得られた。

研究4（永井・山崎, 2017）では、抑うつ傾向に至る前段階の日常ストレスと攻撃性（反応的表出性攻撃、反応的不表出性攻撃、道具的關係性攻撃）との関連を検討した。その結果、全攻撃性について、攻撃性が高いほど、ストレス反応も強くなっていた。ここで、3攻撃性間の重なりを排除したところ、道具的關係性攻撃のみが高い児童は各ストレス反応下位尺度すべてにおいて、低攻撃児（3種すべての攻撃性が低い児童）と比較してもストレス反応が高くなるとは言えなかった。しかし、4つの下位尺度の合計ストレス反応得点は低攻撃児に比べて高くなっていた。研究3では男

女で抑うつや学校生活享受感情への悪影響が異なったが、抑うつの前段階と言えるストレス反応全体では男女とも道具的關係性攻撃が高いほどストレス反応が高くなっていることが明らかになった。

研究 5（坂井・山崎，2004b）では 3 つの攻撃性の高い児童の攻撃性の社会的情報処理 6 段階のうち、第 5 段階の「反応評価」および「結果予期」について調べた。第 5 段階での認知の歪みを引き出しやすいとされている明確な挑発（加害者の意図が故意である場合）を含む葛藤場面に対する反応として、3 種類の攻撃性それぞれに対応した 3 種類の反応パターン（反応的表出性攻撃反応、反応的不表出性攻撃反応、道具的關係性攻撃反応）を用意した。道具的關係性のみが高い児童は、低攻撃児に比べて、すべての攻撃反応を肯定する傾向が強かった。次に男児女児それぞれについて、攻撃性の高さが彼らの社会的情報処理の第 5 段階にどの程度影響しているかを共分散構造分析で調べたところ、高道具的關係性攻撃児は種類に関わらず、攻撃反応を肯定するような認知をしており、なかでも關係性攻撃反応は道具的關係性攻撃の高さからの正の影響を大きく受けていた。

これにより、高道具的關係性攻撃児は、關係性攻撃反応はもちろん、不表出性攻撃反応や特に表出性攻撃反応を示すことを容認（承認）し、様々な高攻撃児との仲間集団形成の可能性を示した。このような集団は学級の中で様々なトラブルを引き起こす可能性が考えられた。

研究 3、研究 4 および研究 5 の結果の背景には児童の仲間関係が関与していることが考えられ、研究 6（永井，印刷中）では児童の仲間関係と攻撃性の関連について調査し、高道具的關係性攻撃児の仲間関係の質（学級内で最も仲の良い友だち：Best Friend との相互の自己開示と相手理解の程度）と量（自己開示と相手理解をしている／されている人数）の特徴を明らかにすることを目的とした。その結果、仲間関係の質と量共に、道具的關係性攻撃のみが高い児童は低攻撃児より Best Friend から自己開示を受けていると認識し、自分に対して自己開示しているクラスメートの人数も多いと認識していた。

さらに、高道具的關係性攻撃男児は低攻撃男児と比べ、自分を理解しているクラスメートの人数や自分に対して自己開示しているクラスメートの人数、そして相互理解しているクラスメートの人数、お互いに自己開示しあっているクラスメートの人数も多いと認識していた。このように、道具的關係性攻撃のみが高い児童で一貫してみられた自分からではなく相手からの相手理解・自己開示が多いとする認識は彼らの友人関係におけるアンバランスさを示していた。

今後の研究課題として、高道具的關係性攻撃児自身の発達段階が進んだ場合の健康への悪影響の可能性、高道具的關係性攻撃児が様々な攻撃性の高い児童と仲間集団を形成し、学級内で様々なトラブルを引き起こしている危険性から、小学校段階での介入の重要性が指摘された。そして、今後、彼らの社会的情報処理の特徴などを踏まえた道具的關係性攻撃適正化プログラム作成のための基礎的データを積み重ねる重要性、プログラムに関するトレーニングを受けた上で、クラス担任がクラス全員に対してプログラムを実施するタイプの介入（ユニバーサル予防介入）が望ましい点も指摘され、12 章では道具的關係性攻撃の高い児童への教育・予防的介入の意義と道具的關係性攻撃への予防的介入プログラムの現状と問題点、さらにはその理想形について論議された。